

米國防衛の前哨地アラスカ

ウィリアム・エム・フランクリン稿

鳥谷剛三 譯

は し が き

本文は米誌「外國事情」(Foreign Affairs. Oct., 1940. Vol. 19, No. 1) 所載の Alaska, Outpost of American Defense の全譯である。

今日、太平洋の全面的攻勢を呼號し、北方基地の推進に腐心しある敵米國の意圖は既に本論文に於て遺憾なく露呈せられて居り、殊に最近太平洋の彼方にあつて頼りに喧傳しあるアラスカ公路の經緯も茲にその片鱗を覗ひ得ることと信ずる。而して、本論も一度び注意の眼を以て看るとき、所謂「防衛」の名に籍口し、敵米國が如何に戦前より侵略の毒牙を磨きつゝあつたかは極めて明瞭であり、譯者の卑見を以てするならば、本論文の題名を「對日進攻の前進基地アラスカ」と書換へることにより、讀者は一層明白に北太平洋に於ける敵の野望の核心を把握し得ることと信ずる。因みに、著者は ロックフェーラー 外國關係調査會の準調査員である。尙翻譯に當り地名その他は慣例に従つた。(昭和十九年六月二十日譯者記)

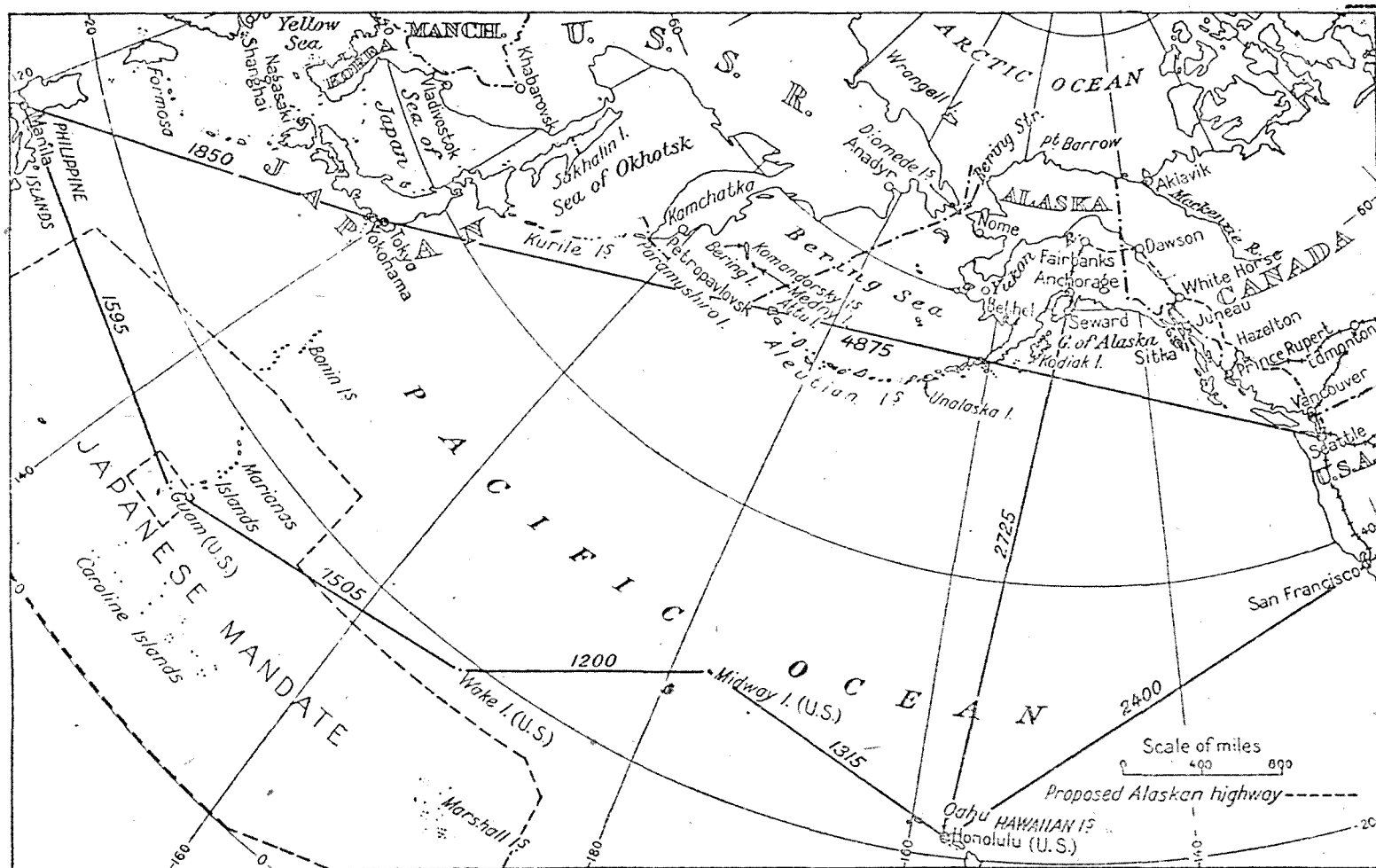
故ウイリアム・ミツチエル將軍は嘗てアラスカを『米國防衛上唯一の急所』と名付けた。これは空軍至上主義の始唱者であつた同將軍の言明したもののだけに、極めて意味深いものがある。何故なれば、わが西半球防衛計畫に於けるアラスカの戰略的重要性が俄然注視の焦點となるに至つたのは、實に、空軍の重要性の夥しい増大に基因するからである。

嘗て『セワードの愚擧』^(註)として識られてゐたこの領土も、今や侵略的帝國主義時代となるに及んで、その戰略的位置と龐大なる未開發資源とを領有せんとする列強の好對象となつた。アラスカは莫大な金、銀、プラチナ及び石炭の埋藏量を有し、且これに次いで錫、石油、鉛、銅、アンチモニー、亞鉛、鐵及び蒼鉛の有用なる鑛床をも有すると云はれてゐる。併し乍ら、鑛物に關する限りその踏査範圍はアラスカ全土の半ばにも達してゐないのである。また、木材、毛皮、魚類(殊に鮭)の供給量は莫大なものがある。然るに、この龐大且有益なる地域に居住する人口の總數は六萬人強に過ぎず、白人は僅にその半數である。而も一ヶ年前迄アラスカの『本土防衛』と稱するものは、チルクート兵營に駐屯する歩兵三百と、加ふるに、露軍の殘置して行つた舊式な加農砲一門―而も現在は何と植木鉢の代用を務めてゐるのであるが―とに過ぎなかつたのである。

(註)ウイリアム・ヘンリー・セワード (William Henry Seward) 一八〇一年紐育州に生れた米國有數の政治家。一八六七年アラスカ買収に關し露西亞との交渉に當り、條約を締結す。當時酷評を受け「セワードの愚擧」(Seward's Folly)と云はる。一八七二年歿。アンカレッジ南方に同氏の性を冠したる都邑あり。(譯者)

太平洋方面に於けるアラスカの戦略的意義はその本來の重要性にも増して遙かに大きい。附圖を一見すれば判る如く米國西岸と日本とを結ぶ大圈航路は南アリューシャン列島に近接して通過し、その最西端に位するアツツ島は〇〇に所在する〇〇海空軍基地より僅に六六〇哩の地點に存在する。アリューシャン列島經由シアトル―横濱間の距離は約四、九〇〇哩、ホノルル、ミッドウェー島經由の距離は大略六、五〇〇哩である。更に、アラスカ、アリューシャン列島を經由し、飛石傳ひに一行程九〇〇哩以内といふ樂な旅も出来るのである。之に反し、眞珠灣（ホノルル近郊）經由の航路は、最初に約二、四〇〇哩の公海をひと航海し、最後に日本委任統治領を縦斷し、一氣に涉破しなければならない。而もこれら日本領島嶼の有する軍事的機能は、戦時、恰も空母と潜水母艦の大群を髣髴せしむるものがあらう。若し米國艦隊が西太平洋に於て攻勢に出るとすれば、アラスカ、アリューシャン列島に適當なる基地を設置することは絶対に必要であらう。また、他面、たとへ合衆國が同水域に於て守勢に立つとしても、これらの諸基地は、ハワイ諸島のわが一大要塞オアフ島を迂回せんとする敵の側面攻撃を挫折せしめ、わが艦隊を掩護するであらう。また、我々はシアトル―ホノルル―ウナスカを結ぶ戰略的三角形に長距離哨戒飛行艇を翔ばし、西太平洋の制空權を確保することも出来るのである。

航空機の發達は、多年アラスカにとり最上の防備たりし北氷洋による隔離を急速に破壊しつつある。一九四〇年六月には汎米航空路會社（Pan American Airways）はシアトル―ジュノー間の定期旅客便を開設し、斯くてアラスカは從來の船舶の所要日數に比し約三日間合衆國に近接せしめられたのである。太平洋アラスカ航空



路會社(The Pacific Alaska Airways)の連絡空路はジュノーよりホワイト・ホース、フェアバンクス、ベセル及びノームに及んでゐる。東半球よりする北極横斷飛行は、一九三七年三人のソ聯飛行士が六十三時間十七分を以てモスクワ―ヴァンクヴァー間の無着陸飛行を成就して以來、明かに實現可能と化した。アラスカ及びアリューシャン列島の幾多の地點は、ソ聯並に日本領土よりする爆撃圈内にあり、〇〇の日本軍基地及びカムチヤツカ半島ペトロパロフスクに所在するソ軍潜水艦・空軍基地はアリューシャン列島最西端の島より七〇〇哩の地點に横たはつてゐる。コマンドルスキー諸島にあるソ軍基地は米國領土より僅に三〇〇哩の距離にあり、また、アラスカ、シベリヤを隔つベーリング海峡は幅僅に五六哩に過ぎない。

以上のほか、更に重要性を附與するものとして次の情報がある。即ち、最近の新聞はこの殆ど世に知られてゐない北太平洋の一角に於てソ聯が軍事的性質を有する活潑な動向を示して居る旨報じてゐる。昨年七月ソウェート政府は、シベリヤのハバロフスクよりペトロパロフスクに至る一、四〇〇哩の旅客空路を開設せる旨公表した。また、ベーリング海峡に位し、アラスカ領小ダイオミード島より約八哩の距離にある大ダイオミード島に於てもソ聯の軍事活動が報ぜられてゐる。傳へる處によれば、コマンドルスキー諸島のベーリング島並にメッドヌイ島に於てもソ軍の軍備増強が行はれてゐることである。これら兩島に於ては着陸場が存在すると云はれ、また、ベーリング島には潜水艦基地も現存する。一九三〇年以來コマンドルスキー諸島及び附近島嶼の周邊三十哩の一帯は、軍事的理由のもとに、一切外國人の立入禁止地域となり、この數年間に、多數

の〇〇漁船は同地域に於て不可思議にも行方不明となつた。一九三九年十二月獨逸海軍將校の一團がソウェー
ト海軍機に便乗し、コマンドルスキー諸島を訪問、一ヶ月以上に亘つてソ軍基地を研究した旨報道せられた。
これらの報道に關しては、その眞疑の程は検討し得べくもないが、併し、所謂『消息筋』の情報であり、従つ
て、これらの持つわがアラスカ前哨地との關係に照し合せ、注意深く考究せらるべきものであらう。今夏アラ
スカ長官アーネスト・グルーニングは一米國新聞記者に『落下傘兵二十名を以てすれば、アラスカは占領出來
得る』と語つた。勿論、同長官は衆目を惹くため殊更に誇張して云つたのであるが、この言葉はアラスカが最
新式戦法たる空よりする奇襲占領に對して比較的高度の脆弱性を有する事實を明示するに役立つてゐる。

從來米國陸海軍主腦部はアラスカ防衛の爲に貴い租税を惜氣もなく注ぎ込むのを潔しとしなかつたのであ
るが、斯く云ふたからと云つて別に此等の人々を批判して居るのではない。何故ならば、アラスカの空襲に對
する脆弱性は、米國防衛計畫に於けるその戰略的價值と共に、極めて最近に發生した事象であるからである。

一九三七年陸軍作戰局(The Army's War Plans Division)の一官吏は『國防上の見地よりするならば、アラス
カに於て陸軍守備隊を増加する必要は、現在の處、毛頭無さうである』との報告をなした。而も、同年海軍
省は議案第三、九九六號に就いて豫算局へ意見具申をなし、アラスカに於ける海軍力増強に對する割當額一億
弗は豫定の増設計畫に比し過大なる金額であると述べ、該豫算を一千萬弗に引下ぐべく提議した。併し乍ら、
翌年十二月、潜水艦、驅逐艦、機雷及び海軍航空基地に關するヘップバーン委員會(The Hepburn Board)の

報告書が提出せられた際には、漸く、海軍省の態度にも著しい變化が認められる様になつた。ヘップバーン報告書は次の事實を指摘し、江湖の注意を促した。即ち、『最新型哨戒機は信頼性も増し、行動半径も亦増大し、従つて、米國艦隊に對して寄與すべきアラスカ基地の價值は甚だ高揚せられた』と。更に、同報告書は、アラスカ地域に於ける海軍航空基地は『戰時、絶対に必要』であり、また、アリューシャン列島は最大なる戰略的重要性を有する旨強調した。ヘップバーン委員會はアラスカ全域に亙りその地理的・氣象的狀況を丹念に分析し、シトカ、コデヤック及びウナラスカに於て海軍航空基地を、また、後者の二地點には潜水艦基地をも建設すべしと提議したのである。

ヘップバーン報告書が提出せられた當時は、シトカに一小基地を有するのみで、同所には哨戒機六機よりなる半個飛行中隊が三ヶ月乃至六ヶ月の交代勤務で駐屯し、同隊は附近のヤポンスキー島にある舊海軍燃料貯藏所の建物を利用してゐた。同委員會の意見によれば、これらの施設は『御粗末で、一時的間に合せ』であり、従つて、改良と擴張とを施し、シトカを二等空軍基地とし、一個哨戒飛行中隊の外に、『臨時増強』に際しての十分なる居住施設と揚陸設備とを施すべしと提案した。アリューシャン列島に關し、同委員會は、純戰略的に考察するならば、出来る丈、西方に―アッツ島にでも―基地を設けねばならぬであらうとの感を抱いてゐた。併し乍ら、同委員會は、ウナラスカ島は『基地として、平時、法外な維持費を必要としない最西端の地點……』であるとの意見を持してゐた。従つて、該報告書には、ウナラスカ島に一個哨戒飛行中隊及び一個

潛水分艦隊の收容設備を施すべき旨が提議せられてゐる。同委員會の意見によれば、コデアック島は、將來、三個哨戒飛行中隊を直に補充し、アラスカ前哨地に於ける他の二個の二等基地に要する機械設備と所要燃料とを補給し得る一大空軍基地として最も發展性を有するものであつた。また、一個潛水分艦隊を操作し得る施設も同島に建設すべきであると主張した。更に、同委員會は、ウナラスカに潛水艦基地を、シトカ、コデアックに海軍航空基地を可及的速かに完成すべしと提案した。

一九三七年末、海軍は行政令によりコデアック島ウイミンズ灣に廣大な土地を獲得し、爾後幾何もなく、該報告書提案による全三基地に於ても建設工事が開始せられた。コデアック島基地建設費として九百萬弗、シトカ建設計畫に對しては二百萬弗を越ゆる金額が充當せられた。右三基地建設豫算は、去る米國國會會期中、三千萬弗に増加せられ、該工事は急速なる進捗を見てゐる。これら諸計畫に聯繫し、合衆國海岸防備隊及び海軍水路部はアリューシャン列島―同列島中の幾多の灣、河口に關しては未だ満足すべき水路圖の完成を見てゐないのであるが―をも含めたアラスカ水域の詳細なる測量に着手したのである。

他方、陸軍も撫然として手を拱いては居なかつた。アンカレッヂ、フェアバンクスの陸軍基地建設の爲に敷地が必要とせられ、就中、後者に於ては寒地飛行實驗所―同市は嘗て華氏零下七十二度になつたことがある―としての特殊設備を施すべき必要があつた。過去一ヶ年間これら兩基地に於ては米國空軍の着陸場建設工事が強行せられ、陸軍の極北に於ける冬期間の作業技術が改良せられたる結果、既に長さ一萬呎以上と傳へられる

二大滑走路の完成を見たのである。一九四〇年の夏、陸軍航空司令官、陸軍少將エッチ・エッチ・アーノルドは視察旅行の途上アラスカへ翔び、また、下士官七六四名並に將校三〇名はアンカレッヂの基地へ派遣せられた。近き將來、目下進捗中の建設工事が完成せられた暁には、更に、防空及び砲兵部隊を含む將校二〇〇名、下士官三、〇〇〇名がアラスカへ派遣せらるであらう。

アラスカの天候は、他愛もない世間話の種どころか、寧ろ、緊禪一番以て研究に當るべき課題なのである。軍隊も、飛行機も、裝備も、凡て、氷點下の溫度に於て試験せられねばならない。加之、濃霧狀態、風向及び地方語で『ウィリイウオウ』(williwaw)と稱するアラスカ特有の疾強風に關する知識も必要である。氣象關係の資料は、今や彈道學のみならず、航空に於ても亦、重要な素因と化し、従つて斯學研究の軍事的意義は贅言を要しない。アラスカ前哨地に所在するわが新基地の發展に伴ひ、無線電信局、測候所の増設は急速なる實現を見、アリューシャン列島に沿ひ、遠く西の方アッツ島に及ぶ一聯の觀測所の建設計畫は遂行せられて居り、就中、アッツ島は所謂『天候製造所』("weather factory")の中心に位し、東方遙か五湖地方に至る北アメリカの氣候に對して影響を及ぼす大旋風運動(the great cyclonic movements)もその多くは此處を起點としてゐるのである。斯かる氣象情報は、直接、陸・海軍の作戰に資するばかりでなく、また、アラスカに於て、アメリカ新開地地方の鐵道とほぼ同一の役割を演じてゐる商業航空を通じ、アラスカの發展を促進するに役立つであらう。

アラスカの經濟的・商業的發展は、國防上重要なものとして、陸海軍兩省の認むるところとなつた。一例を挙げると、アラスカの運輸上の缺陷は今や現實の問題と化してゐる——即ち、アラスカには實際役に立つ鐵道と云つては唯の一本しかなく（セワード—フェアバンクス間）、その公路網も範圍が限定せられてゐるばかりではなく、また、その性格も原始的なものである。加之、十分なる住宅設備、工場施設の缺如は、當然の結果として、新に海・空軍基地を建設するに當り、多大の不便を醸し、多額の特別經費を必要とした。アラスカは亦多種の勞働及び資材に關し全く合衆國に依存してゐる。而も、この依存性はアラスカ自體の經濟的發展が相伴はない場合には、諸基地の相繼ぐ建設に伴つて、今後益々増大する趨勢にあるのである。

近年アラスカは漸く國內需要を充すに足る石炭を產出するに至つた。而も該工業の擴張は極めて望ましいものである。また、アラスカの礦物資源の正確なる埋藏量を算定し、その產出額、殊に戰用礦物のそれを増加せしむる基礎を築かんが爲には、今後更に地質調査を實施することが肝要である。原油は幾多の地點に於て發見せられたのであるが、未だその產油量は僅少であり、間歇的である。海軍基地の建設に伴ひ、今後調査と試掘とにより、產油量の増加を圖ることは、戰略的に見て、當を得てゐるものと云へよう。アラスカの農業生産高すらも、アンカレッジ北方に位するマタカスカ谿谷の移民地——一九三五年移民早々困難な事態に當面したが、現在は安定せる繁榮期に到達してゐる——に倣ひ、他の移民地に於ても編成替を實施し、大いにこれを増加し得るであらう。

アラスカ開發を唱道する人々は、多年の間、アラスカの工業及び農業に對する最大支援の一つとして合衆國との連絡路の建設を主張し來つた。最近シアトル―ジュノー間に開設せられた週二回の定期航空便を除いては、アラスカ―合衆國間の一切の交通は、現在の處、船舶に依る外はないのである。西部加奈陀經由のアラスカ公路の建設は既に一九二九年の昔から眞劍に提唱せられ、翌年フーヴァー大統領は三人より成る委員會を任命し、該提案を研究し、その成果を國會に報告すべき旨命令した。同報告書は一九三三年五月一日提出せられ、該公路は全く實現可能であり、アラスカ開發にとり明かに有利なる旨を保證したのである。一九三八年ルーズベルト大統領は、更に、該案を検討すべく第二次委員會を指名した。同委員會は、更に四年間重任を命ぜられ、その第一回報告書は目下印刷中である。

處が、一方では、一九四〇年六月十一日にアラスカ選出米國國會議員アンソニー・ジェー・ダイヤモンド氏が國會に議案を提出し、該公路建設の認可並に同目的の爲に二千五百萬弗の豫算を充當せよと建議した。同氏は、議事の急速處理を期し、該案を現下の國防問題に聯繫せしめ、左の條項を挿入した、即ち、『大統領は、國防上、自ら、最適と判斷したる道筋に該公路の位置を選定し、之が建設を命ずるものとす』と。茲に於て、該公路の軍事的價值は始めて言及せられ、其の結果、該案は全く新なる方向を辿るに至つたのである。即ち、一九三三年の大統領任命による委員會は、該公路のもつ一切の諸利益を極めて詳細に論じてはゐるが、その軍事的價值に就ては一言も觸れて居ないのである。惟ふに、ナチスのノールウエー作戰の奏效こそはアラスカ公路

問題の強調點を變移せしめた原因だつたのであらう。多數の有力者達はノールウエーに對する英國の立場とアラスカに關する米國の立場との相似點に一驚を喫したのである。アラスカ領が電撃的に占領せられた曉には、米國はノールウエーに於て彼の英軍の逢着せると同様の狀況下にあつて、海上より作戰し、困難なる上陸を敢行せねばならないであらう。勿論、類推は極端に失してはならないが、然し、狀況の相似は、敵の爆撃機及び海上輸送の危險の比較的少い内國交通線を提供して呉れるアラスカ公路の必要性を更に證據立てるものであつた。

陸路シアトル―フェアバンクス間の距離は、大略二、三〇〇哩で、その内、現に存在する約一、一〇〇哩の道路は之を利用し得るのである。新たに構築すべき大部分はヘイズルトン（英領コロンビヤ州）よりアラスカとユーコン州との國境地に至る未開拓地帯を経由するものであらう。同地帯は相當程度測量され、また、空中撮影もなされたのであるが、その結果、公路建設上支障となるべき重大な地理的障礙は存在しないことが判明した。勿論、降雪状態は一つの問題とならうが、然し、この困難は、合衆國や加奈陀の北部地區に比して、恐らく、大差なきものであらう。

云ふ迄もなく、該公路の建設にとり加奈陀自治領の協力は先決問題である。目下、米國國會に提出中の法案は、該公路の建設費たるべき米國資金は米國の勞働及び資材に使用すべしと規定してゐる。勿論、これらの細部決定並に該公路の道筋の確定をなすに當つては、加奈陀と今後接衝せねばならない。併し乍ら、該公路の建設により、英領コロンビヤ州及びユーコン州の享受する利益が如何なるものであるかは、加奈陀自治領の熟知

する處であらうし、また、太平洋方面の加奈陀防衛が、主として合衆國の双肩に懸つてゐる事實も忘れることは出来ない筈である。今次大戰に於て英國が敗北した際、加奈陀の政策が、將來如何なる方向を執るか、これを決定すべき政治的並に軍事的意義が、今後更に、わがアラスカ前哨地に對して附加せらるゝに至るであらう。

〔完〕